

ヅラ刑事

2006(平成18)年8月10日鑑賞(東映試写室)



原作・脚本・監督＝河崎実／出演＝モト冬樹／イジリー岡田／ウガンダ・トラ／なべやかん／浜田道彦／桐島優介／中野英雄／橋本まい／ドクター・中松／堀内正美／江口ヒロミ（トルネード・フィルム配給／2006年日本映画／80分）

……タイトルどおりの何ともバカバカしい映画に、思わず苦笑……。プレスシートには、ノリノリの河崎実監督をはじめ、お友達のマンガ家たちがサークル感覚で(?)いろいろと自画自賛しているが、所詮ギャグ満載のテレビドラマの延長……。大物歌手(?)モト冬樹もこんなアホバカ・バラエティー路線の初主演に喜ばず、もっと別の道を模索してもらいたいもの。それにしても、「ハゲ」とか「ハゲ茶ビン」というセリフの過激さには、身に覚えのある人は、いたたまれないのでは……？

「構想堂々10年！」だが……？

この『ヅラ刑事』は、『いかレスラー』『コアラ課長』で有名な河崎実監督の「構想堂々10年！」の「執念の賜物」らしい。たしかに、プレスシートにはそう書いてある。

しかし、私流にその文脈を読み解くと、それは飲んだ勢いで思いつきが思いつきを生んだという程度の意味であり、「構想」とか「執念」という言葉はあまり適切とは考えられないもの。まあ、受け止め方は人それぞれだろうが……？

同じ日に河崎実監督の作品を2本！

私は『いかレスラー』も『コアラ課長』も観たことがないし、河崎実監督の名前も全然知らなかったが、8月10日(木)は1時30分から『ヅラ刑事』を観た後、3時30分から同じく河崎実監督の『日本以外全部沈没』を観た。そして私の採点

は、後者は星5つと絶賛したのに対し、前者は星2つ。これはあくまで私流の好みを前提としたうえでの独断と偏見にもとづく採点だが、私にはこの2作品はこれほど大きな開きがある。それは一体なぜだろう……？

評価が大きく分かれる理由は……？

その理由は2つ。第1は、私は白髪ながら57歳にして髪の毛はタップリとあるから、ハゲとかハゲ茶ビンという言葉には縁遠いし、アートネイチャーをはじめとするかつらのコマーシャルにも全く興味がない。したがって、そもそもこの映画の主人公であるヅラ刑事が、必殺ワザ「モト・ヅラッガー」を編み出し、会得するに至った事情、すなわち、恋人の涼子に振られるに至った悲しい事情についての同情心や共感の気持が全くないこと。

酒の席でそんな悩みを打ち明ける話題になっても、私は冷たく「そんな話はどうでもいい！」と言い放つかも……？

第2の理由は、私はアホバカ・ギャグやアホバカ・バラエティーが基本的に嫌いなこと。ヅラ刑事のキャラを思いついた河崎実監督は、友人のアイデアである「デカチン刑事」をサブ・キャラにして、一見マイナス要素の男たちのキャラを集めたら面白いと考えたらしい。しかし、そもそもそんなギャグ自体が私には全然面白くないから、どうしようもない。

『日本以外全部沈没』もたしかに『日本沈没』に対するパロディであり、ギャグであることはたしかだが、そのギャグのレベルは大違い……？

ストーリーの平凡さも目につくが……？

私の大好きな本格的ミュージシャン(?)モト冬樹が、映画初主演として演じるのは警視庁の刑事、源田初男。ヅラさんと呼ばれる彼は、必殺ワザ「モト・ヅラッガー」で次々と難事件を解決していたが、所詮一匹狼……。そして、ヅラ刑事と同じような個性派(?)刑事が集まっているのが、花曲署捜査一課。

導入部におけるある事件を経て、この花曲署の面々が立ち向かう大事件は、十三号村・原子力発電所における謎のテロリスト集団による核燃料の強奪事件。そこに浮かび上がってきた犯人像は、元過激派「アジアの牙」のメンバーで、高校

で物理の教師をしている蛇沼徹也（堀内正美）だった。

ところが、ヅラ刑事はこの蛇沼が顧問をつとめる物理研究部の部長、中里耀子（江口ヒロミ）の顔を見てビックリ。彼女はヅラ刑事のかつての恋人涼子のそっくりさんだったから……。

この映画のストーリーは、そんな凶悪犯人を追うヅラ刑事を中心とする各刑事たちの活躍を描くものだが、どうしてもギャグ調がメインになってしまうため、「核爆弾の爆発まであと48時間！」と言われても全然緊張感が湧いてこない。別に俳優陣の演技に問題があるわけではないが、そんなわけでストーリーの平凡さが目についてしまうのだが……？

邪悪な女子高生の更生は……？ そのセリフに異議あり！

この映画は、もちろんヅラ刑事を演ずるモト冬樹がメインだが、ストーリー的にはテロリストのリーダーである女子高生の耀子がヅラ刑事の娘であったことが、アツと驚く大きな仕掛け……。そんなネタばらしをしていいの、と怒られそうだが、プレスシートのストーリー紹介でもそれは書いてあるのでまあいいだろう……。

そして、この映画が観客の心に訴えるのは、なぜ彼女がテロリストへの道に走ったのかということだから、それはそれなりに理解し、感動しなければ……。もっとも、弁護士の私が興味をもつのは、こんな事件を起こした彼女の更生の可能性……。ところがこれがいけない！ 逮捕されてパトカーに乗り込む耀子が、「早く罪を償って出て来いよ」と励ますヅラ刑事（父親）に対して言うセリフは、「たいしたことないよ。だって私未成年だもん……」

河崎実監督、こりゃないよ……。やはり、いくらギャグ映画とはいえ、映画の社会的影響力をしっかりと自覚してもらわなければ……。

2006（平成18）年8月11日記